

## 一九五〇年代の民話運動 — 雑誌『民話』をめぐる —

高畑 早希

「戦後民衆文化運動」 国民的歴史学 木下順二 吉沢和夫 宮本常一

### はじめに

本論では、一九五〇年代の日本で展開された民話運動について、この運動の拠点となった雑誌『民話』の分析によって検討する。

一九五〇年代は、アジア・太平洋戦争後の日本の「思想的な潮流

から見ると、左翼系の知識人が、西洋志向から、「日本回帰」と

「民衆志向」を強めた時期」であり、その背景には、「日本がアメ

リカの軍事的支配下に入れられることに対する抵抗のなかで、「日本の民族的自意識・National Identity」を、戦前・戦中期の「天皇」

を中心としたそれとは異なったかたちで構築しよう」とする事情があった(一)。民話運動は、うたごえ運動や国民的歴史学運動、

生活記録運動やサークル活動など、この時期に発生した数多くの草の根的文化運動の一つとして誕生し、「民族」の新しい文化の形成を目指して展開した。

「戦後の混乱を脱し、高度経済成長期を用意した時代」として認識されがちであった一九五〇年代の見直しは、二〇〇〇年代の半ばから歴史学や文学研究の分野で盛んになり(二)、サークル研究として活発化したそれらの成果が、二〇一〇年代に続々とあらわされた(三)。

民話運動の再評価がされたのもこの時期であり、主として口承文芸研究において検討されてきた。それらの研究は、民衆文化運動と意識的に距離をとった戦後の民俗学に対して批判的な検証を行っている。「生活疑問」に向き合う学問として出発したはずの民俗学が、大学の学問分野になる過程で、過去の民俗文化を扱う研究分野に内閉していくあり方が批判され、戦後民俗学が取りこぼした可能性が民話運動のなかに見出された(四)。

民話運動の有した可能性とは、一、現在生きている人々の体験に基づいて語られる「世間話」や「現代の民話」といった話群を分析

や創作の対象としたこと。二、サークル運動など同時代の他の文化運動とゆるやかな人的つながりを持ち、共通の問題(五)を発展させていたことなどが挙げられる。

しかし、一九五〇年代の民話運動、さらにはその系譜において現在まで続く活動が何を成し遂げようとしてきたか、その可能性まで含めた検討は、十分になされていない状況である(六)。

本論は、一九五〇年代の東京の運動を牽引した「民話の会」の機関誌『民話』(一九五八年一〇月〜一九六〇年九月、未来社)を分析対象とすることで民話運動の内実に迫る端緒としたい。

東京を中心とする民話運動は、「民話の会」が中心となった(第一期一九五〇年代)と、「民話の会」を系譜上の起源とする「民話と文学の会」や「日本民話の会」が展開した(第二期一九七〇年代以降)に大きく時期を分けることができるが、第一期の前半に行われた研究会や例会の記録は管見の限りほとんど残っていない。『民話』は第一期の後半に出された雑誌であるが、この時期の運動の内実について、ある程度まとまった形で知ることのできる数少ない資料として重要な分析対象である。

### 一、雑誌『民話』の発刊までと、あいまいな「民話」概念

#### 一―一、雑誌『民話』の発刊まで

民話運動のはじまりをどこに定めるか。当事者達の回想による

と、一九五二年二月一日とするのが共通の認識のようだ。

この日の夜、マルクス主義系の知識人が集まった民主主義科学者協会の歴史部会で、演劇をテーマとした研究会が開かれ、木下順二の戯曲「夕鶴」が取り上げられた。同会が牽引した国民的歴史学運動において、バイブルの一つであった石母田正の「村の歴史・工場の歴史」(一九四八年)が民衆の歴史としての民話を検討素材にしたこともあり、六〇名以上が集まったこの夜の会は、「民族文化としての民話に新しい光をあてよう」と熱い議論が交わされたという(七)。そして一九五二年五月には、この研究会は「民話の会」として民科から独立して活動を始める。

しかし、運動が始まって間もない一九五三年、国民的歴史学運動の「失敗」が、日本共産党の党内抗争の打撃とともに民話運動へも直撃する。この時期を振り返った「民話の会」の年譜(『民話の手帖』一八号、一九八三年)を確認すると、一九五二年には月一回のペースでもうけられていた研究会が、一九五三年には年に七回となり、一九五四年には年四回にまで減少している。その内容としては、話題になった大衆映画や舞台を検討したものが多い。また、数は少ないものの、民話と教育関係の議題は実りをみせたようで、歴史学者の吉沢和夫は「この時期に児童演劇や児童文学との間に民話という問題を中心とした本格的な結びつきが生れていたら、そこから運動の展望はひとつ開かれていったのではないかと思う」と苦々しく振り返っている(八)。

混迷していた民話運動の転機となったのは、一九五五年四月にインドのニューデリーで開かれたアジア・アフリカ会議であった。この会議は冷戦の二極化構造とは距離を置く、いわゆる「非同盟運動」のひとつであり、「反人種主義や経済発展、脱植民地化などを主唱」した（九）。「民話の会」の支柱であった木下順二が、日本代表の一人として出席することが決まり、会議へ集まる各地域の代表に向けた報告書が急遽作成された。「民話の会」の運営委員会議長だった益田勝実と、事務局長であった吉沢和夫が原案を作成し、推敲のための討議には「木下順二・関敬吾・松本新八郎・松島栄一・木村次郎・土生三郎・藤浪隆之・小池タミ子・坂部裕郎・市川昌・山口昌男・富田博之・天野二郎・草部典一」ら一四名が参加した（一〇）。原稿は木下順二によって英語へ訳されてニューデリーに持ち込まれている。

このときに作成されたレポート「日本における民話の問題」は、雑誌『文学』（一九五五年六月号）で日本語に再度訳されたヴァージョンを読むことができる。要約すると、まず、民話などの「民衆の芸術的所産の歴史」と、そこにおいて民話が果たしていた「社会的機能」を十分に明らかにする理論が確立されていないために、「日本の歴史、なかならずく芸術、文学」における民話という「芸術創造行為」の位置づけが充分でないこと、そして作家や俳優、学者との「執拗な検討研究が充分でない」ために、かえって近代的な個人の感覚によって民話を「曲げる」恐れがあることなどが指摘され

る。加えて、「民話の伝統を研究し、それを発展的創造的に継承しようとする運動」をとおして、「日本の民話の伝統」が「アジア諸国との非常にはるかな昔からの交渉」のなかで育てられたものであることに気づかされたと述べられ、「アジア的な広い視点」から研究が出来るようになることへの期待で締めくくられている（一一）。

バンドン会議のための報告書づくりは、現代における「民話」の問題を整理する外的なきっかけとなり、尻すぼみになっていた運動に対する「一種の使命感みたいな気持」を関係者のうちに新たにさせたという（一二）。

### 一一二、あいまいな「民話」概念

さて、ここまで「民話の会」が民話という問いによって、文化運動を立ち上げようとした過程を確認してきた。

しかし、あらためて疑問となるのは、この運動において「民話」という言葉の持った意味である。一九五八年一〇月に発刊される雑誌『民話』はこの問いをめぐって展開されたと言ってよいが、二年間の検討の結果として、「民話」についてなにか一つの答えが導き出されたとはいえなかったようだ。刊行も終盤になった第一六号のシンポジウム「民話劇の問題」では、登壇者の広末保から、「民話」という言葉をめぐって次のような疑問が出されている。

〔民話を…引用者注〕劇にする場合もあるし、思想として学ぶ場合もあるだろう、文学にする場合もあるだろうし、しかし、民話の独自性といわれても、雑誌「民話」というのは一種の比喩的な題じゃないかとすら傍のものは考えるわけです。何のために、「民話」を、特にほかならぬ「民話」をあつかっているのか

『民話』一六号、四六頁

雑誌『民話』における「民話」とは「一種の比喩」ではないか。

この指摘はおそらく正しい。運動の当事者にもそれは自覚されており、「民話の会」の休会と雑誌の休刊を告げる第二四号では、「民話遺産をめぐるさまざまの渾沌たる問題」を明確にするという当初の目標が「希望的観測に終始した」（民話の会「脱皮のために沈潜を求めて——休刊の辞」）ことや、雑誌が「総合雑誌」化したことへの反省（西谷能雄「「民話」の休刊にあたって」）、「民話と自分の関係をびったりと捕えることができない」「もどかしさ」（木下順二「次の段階へ」）などが自省的に語られている。

雑誌『民話』は確かに「総合雑誌の小型版」のような雰囲気である話について議論し、その結果、民話の「泥くささ」と「動きつつある日本の現実」を「なんとなくチグハグ」に同居させたままに休刊を迎えた。

しかし、後年の運動者にとっては、一九五〇年代の民話運動の多

様な展開や、ある種の「あいまいさ」は魅力としてとらえていた向きがあるのも事実であり（一三）、運動の実態を探るためには検討が避けられない課題である。

次節からは、雑誌『民話』で繰り広げられた議論を中心に、「民話」にまつわる多様な捉え方を、四つの観点から整序する（一四）。

## 二、雑誌『民話』における「民話」

### 二―一、「民族」の民話

雑誌『民話』は一九五八年一〇月に創刊され、月刊誌として、一九六〇年九月の休刊までに二四号を刊行した。版元は未来社（一五）で、編集委員は、木下順二、西郷竹彦、竹内実、益田勝実、宮本常一、吉沢和夫の六名である（一六）。四号時点での発行部数は五千部で「この種機関誌としては成功的」な部数とされている（一九五八年度「民話の会」総会より「五号」）。読者についての明確な統計はないが、九号から二四号までの読者欄を見ると、各地の民間記録の会や、民話の研究会の会員、小学校の教師、大学の児童文化サークルの学生、主婦などからの投稿が見られる。

『民話』の創刊号は次の言葉ではじまっている。

機関誌『民話』の目的は会自体のそれと同じで、手短かにいう

ならば新しい日本文化の創造、その問題を民話を通して考え

かつ実践して行きたい、ということに尽きる。「…」まず民話を、スプートニクの飛んでいる現代と切りはなさずに考えるという姿勢を持つこと。しかしそのためには、古い伝統、文化遺産としての民話を一方で十分大切に扱おうとすることが忘れられてはならないだろう。同時にまた、民話というものの内容をいたずらに狭く考えないこと。そしてそのためには、文化全般に対する広い視野の中に民話を置いて眺める態度が忘れられなくてはならないだろう。さらに民話についての厳密な民俗学的・歴史学的研究が重要であるのと同時に、民話的精神や民話的心情、民衆の知恵の結晶としての民話、そういう面へのせん細な柔軟なそして鋭い理解と感覚も、また忘れられてはならないだろう。

「新しい日本文化のために―創刊の辞―」『民話』一号

民話運動の成立の過程に歴史学の影響があったことは先に述べたが、国民的歴史学運動が終焉を迎えた一九五五年から、約三年の時間が経過した『民話』の「創刊の辞」にも、〈民衆≡民族〉による新しい文化の創造という、敗戦直後のマルクス主義歴史学の影響が看取できる。しかし、大学の歴史学研究から乖離して、大衆万能主義的な傾向をみせた先の歴史学運動（一七）の反省もあつたか、創刊号では、民話を「広い視野」のなかで眺める姿勢が強調されているようだ。

伝統文化をあつかいつつも、「スプートニクの飛んでいる現代」を意識する本誌は、「昔話」ではなくあえて「民話」の語を選択している。「昔話」がこれまで語りつたえられて来たはなしであるのに対して、「民話」はそのことプラス、これからつくり出されて行くはなし」（一八）であるという現代性を持ち、かつ、未来への志向を保持しているという認識による選択だ。

創刊号の巻頭シンポジウム「日本人」では、語り手と聞き手が「イロリをかこむ共同体のなかで伝えられてきた民話を「われわれのものにする」ために「何か普遍性を一つ高いところ」で与える必要があるとする石母田正の言葉で閉じられているが（一号、二五頁）、この提言は、雑誌『民話』の使命の一つとして繰り返し論じられる。民話は、大衆と知識人の垣根を問わず、比較的「前おきなしにすつと理解」（西郷竹彦「現代の民話Ⅰ尾ひれがついて羽のはえる話」一号）されやすい媒体とみなされていたが、この「理解」を「イロリをかこむ」共同体を越えた「民族」の規模で「ナチュラルに」（シンポジウム「民話劇の問題」一六号）展開することが一つの目標とされたのだ。木下順二の民話劇による「普遍的方言」の創作の試みもこの志向のひとつのあらわれといえよう。

## 二―二、個人の民話

民話の「典型化」や「普遍化」といった民族文化としてのあり方が志向された一方で、雑誌『民話』では、〈個〉の民話の探究の必

要性も繰り返し言われている。

一つは学問の文脈においてであり、世間話など「民衆の現実生活」を反映した話群を民間説話の中から「区別し取り去った結果、民俗学が研究する昔話は「固有信仰研究の道具」にされてしまった」という「民俗学的昔話研究の方向」性への批判（吉沢和夫「民話の古典第一回 聴耳草紙」一号、「笑い話の世界」六号、益田勝実『『炭焼日記』存疑』一四、一五、一七号）として提出された。

また、学問上の立場からだけではなく、民話採訪をする実践者からも、昔話を語るために記憶をたどろうとすると、「苦しげな老女たちの語り口が、身の出来ごとや、定った形をもたないトンチンブリ話や、世間話をはじめると同時に、はればれとなる変化には驚かされた」（いぬい・とみこ「佐渡の昔話の語り手たち」一号）といった形で、個人の語りへの注目がなされ、誌面上で積極的に取り上げられていく（すずき・けんじ「益子茶ばなし」一〜一四号、下沢勝井「「うまよさ」が死んだー伊那の村ばなし」三号、河本勢一「渡りもの話」七号、大庭良美「畑のはなしー島根県鹿足郡日原町聞書（1）」一八号、「日かげの村ー島根県鹿足郡日原町聞書（2）」二一号、読者頁「録音盤」等）。

民話を昔話という「型」に限定しない雑誌『民話』のおおらかさは、民俗学者の宮本常一に連載の場を用意してもいる（一九）。「いままで農村について書かれたものは、上層部の現象や下層の中の特異例に関するものが多く、「貧農の家の日常茶飯事について書

かれた書物」はほとんどなかったとする宮本は、「その生涯がそのまま民話と違っていいような人」（三号、一〇頁）たちの語りを「年寄りたち」というタイトルで聞き書きした。テープレコーダーを用いず、語り手の言葉に自身の創作を交えて語る宮本常一の聞き書きは、同時代のサークル村で展開された「集団創造」のあり方と響き合うものとして、先行論でも議論されている。宮本の連載は二一号まで続き、その後は『忘れられた日本人』（未来社、一九六〇年）のちに岩波文庫へ所収。）として改稿され、一九六〇年代以降に人口へ膾炙していく。

### 二一三、「現代の民話」

「世間話」と同様に、民衆の実生活と不可分の話を表す語として誌面にたびたび登場するのが「現代の民話」だ。この用語は、木下順二が「民話管見」（『文学』一九五二年五月号）のなかではじめて使用したとされている。「矛盾した時代」、「不幸な歴史の唯中」に置かれている「僕たち自身」が「現実の日本の社会の中からすぐれたテーマを探り出し」、「力強い民話」として「現代社会の中に豊かに実らせて行く」ことを希求する木下は、シベリア抑留者が国会に証人喚問された末に自死した一九五〇年の「菅証人事件」（徳田要請問題）を、蛙の世界として再構成した戯曲「蛙昇天」を「僕の民話劇の系列の一番はじに置きたい」と述べている（二〇）。

「ある特定の事件を取り扱いながらも、その事件から、ある時、

ある場所という要素をはぎとって、いつでも、どこでも、小さく、あるいは大きい形で何度も起こったし現に起こっている事件として、意識的に構成する」(二二)姿勢を、木下は後に「現代の民話／民話劇」の創作方法としている。木下のこの立場は、広島の新田で活動していた作家の山代巴が、農村の古い体制に抑圧される農村女性達の語りを、「どこの誰のことだかわからぬようにして、世の中の人に訴え」る話として創作し(二二)、それらを「民話」と称していた姿勢とも響き合う。

山代の『荷車の歌』(一九五六年)は、「農村のリアリティを作ったって受けないじゃないか」(「座談会 映画『赤い陣羽織』をめぐって」二号)という映画業界の懸念を裏切って、農村女性達の十円カンパによって映画化されて大盛況となった。雑誌『民話』は二回にわたって山代巴の『荷車の歌』を論じている(松島栄一「荷車の歌」をめぐって(上・下)一八号、九号)が、そこでも、「「実在する、どこの誰のことでも」ない話として語」る立場を「民話的要素の一つとして注目」している。

現実の事件をモデルにした「現代の民話」は、当事者のプライヴアシーと、抑圧された者同士の連帯やエンパワメントの問題との緊張した関係性のなかで創作されており、興味深いジャンルである。

しかし、雑誌『民話』はこの点についてはあまり深く論究していない。『民話』は、個人の語りやライフヒストリーに大きな関心を

示していたが、例えば『荷車の歌』に、「中国地方の一人の女の生き方という問題だけでなく、それを通して、日本の女性のすべての問題」を見ているように(八号、六頁)、個人の語りを共同体の問題に即結びつけようとする性急さを有していた。二号の書評で、吉沢和夫が、山代の『民話を生む人びと』を「少々期待外れ」と論じているのも、抑圧された民衆が、今日の状況を「突き破っていくのに」「役立っていく」わかりやすい「機知やユーモア」が得られなかった不満に起因しているのだろう。

#### 二四、「現代の民話」と「民話のリアリズム」

「現代の民話」に関して少し毛色の異なる議論を展開しているのが西郷竹彦(「尾ひれがついて羽のはえる話」一号、「歌の凍る話」二号、「ロシアの民話について——ソヴェト教育大学の文学教科書の抄訳——」三号、「銀のつむぎ糸」四号、「〈見える〉世界」五号、「現代の〈まじない〉」七号、「〈見える〉世界の悲劇」八号)だ。西郷竹彦はシベリア抑留後、モスクワ東洋大学の日本学部で六年間日本文化論を講義したのちに帰還し、文学理論研究でアジア・太平洋戦争後の日本の文学教育に大きな影響を与えた人物である。

西郷は、「現代の民話」を「昔話とも異なり、また、実話や実話的な短編小説とも異なる独自のスタイルをもった口承文芸」である(「尾ひれがついて羽のはえる話」一号)としたうえで、「ソビ

エト文芸学」の理論を用いて定義していく（「ロシアの民話について」三号）。

西郷は、彼自身が、「ファンタジアはリアリズムと矛盾するものではない。その基底に現実性をもたぬような幻想はない」というゴードリキーの社会主義リアリズムに関する言葉に影響を受けていた（「ロシアの民話について」三号）（二三）。それに加えて、民話に内在された「虚構による文学的眞実と人々がどう向かい合ったか」という、「口承文芸の文芸という視点」についての分析を欲していた歴史学者たちから要望（吉沢和夫「民話の古典第四回 昔話採集の栞」四号）に応える形で彼は誌面に登場する。

「現代の民話」の虚構性について論じた第五号から、西郷の関心が分かる一文を引用しよう。

《見る》と《見える》の関係、そして、それぞれが《見られる》ものとのあいだにつくりだされる関係は、近代文学におけるリアリズムと、民話におけるリアリズムを考えてゆく上に、きわめておもしろい暗示をぼくに与えてくれる。「…」われわれは（もちろん、ぼくもだが）、文学を論ずるとき、見る主体が現実をどう見るかについては、ずいぶんと考えてきたのだが、現実がどのようにかに見える主体について、また、現実がどのように見えるかについてはあまり考えてはいなかったようである。「…」民話、ことに日本民話の主人公（それは、語り手

である日本民衆のこともあるが）にとって、見る世界としてではなく、見える世界として、存在する現実がある。

「《見える》世界」五号、二九―三〇頁  
ここでは、「民話におけるリアリズム」という語を導入することで、対象物を客観的に「見る」視点ではなく、〈主体∥民衆〉にとって、対象がどのように「見える世界として」現出するかを論じようとしており、民話の虚構を、単なる空想とは異なる次元においてつかもうとしている。

西郷は別のところで、「異類女房」の悲劇や被差別部落の問題、「アメリカにおける黒人の問題」や「ソビエトが赤く《見える》」問題など、差別にまつわる「現代病」にも《見える》リアリズムが否定的な面で働いているとし、これらの《見える》リアリズムと科学的な《見る》リアリズムとの間の対立を統一して、「われわれが求めている真のリアリズム論を確立せねばならない」（「《見える》世界の悲劇」八号）と論じている。

「真のリアリズム」を立ち上げようとする目論見が完遂されたかはさておき、「現代の民話」をめぐる一連の論考のなかで「《見える》世界のリアリズム」という考え方が、「民話のリアリズム」として提出されている事実は、その後の運動との影響関係を考えてると興味深い。

一九六九年に活動を開始し、現在も宮城県で民話採訪者として



活動する小野和子は、聞き書きの場において話者の女性が、客観的には事実と考えられない事象を「事実」として語る現象にたびたび遭遇したという。「伝承昔話によく似た話が「事実」として語られ、それから不思議な驚くべき固有の体験話になり、そこからまた伝承昔話めいた話へと流れていく」語りは、昔話採訪のマニユアルにはないもので小野を困惑させた(二四)。

捕らえようのない語りの群れに手を拱いていた彼女を勇気づけたのが、当時、東京の運動を牽引していた松谷みよ子の「あつたること」という考え方である(二五)。事実としては心許ない話でも、その話者にとって「ほんとうにあつたこと」として話されているならば、その「事実」を尊重して「現代の民話」として聞き書きする立場を松谷はこの言葉に込めて提唱した。一九七〇年代の運動における、このゆるやかな「民話」の捉え方は、現場の採訪者の足を語り手のもとに向かわせ続け、数多くの語りのアーカイブを残すことにつながった。

西郷の「へ見える」世界のリアリズム」から、松谷みよ子の「あつたること」への間に直接的な影響関係が存在したかは、現段階では不明である。しかし、松谷自身が一九五〇年代の運動に影響を受けて民話採訪者になったことや、児童文学者としての彼女のフィールドへ第一次の運動を終えた人々が活動の場を求めて移動したり、オブザーバーとして参加したこと、さらに西郷竹彦が文学教育にコミットしていくことを踏まえると、両者の影響関係は今後考

察していくべき課題と考えられる。

## まとめ

一九五二年に発足した「民話の会」は一九六〇年九月に休会し、『民話』もこの月で休刊となった。「休刊の辞」のタイトルは「脱皮のために沈潜を求めて」であったが、一九五〇年代の民話運動がそのままの体制を維持して浮かび上がることはついになかった。

しかし、「沈潜」の期間中に興隆した児童文学や、子ども文化の分野に合流する形で、民話運動は一九七〇年代に再び運動として浮上する。このとき設立された「日本民話の会」は、二〇一九年で創立五〇周年を迎え、今日まで活動を続けている(二六)。

「民話の会」が休会した理由は明確ではない。『民話』の発行元である未来社の一五年史(『ある軌跡——未来社15年の記録』未来社、一九六六年)をみると、『民話』が休刊した一九六〇年は、「安保反対闘争に明け、そしてその余波がくすぶりつづけた年」で、「著者も読者も、すべての関心は国会へ集中して売上げが激減した」(二七)と書かれており、経済上の危機も休刊の背景にあったと推察できる。

しかしそれよりも、編集委員を悩ませたのは、「民話」という対象そのものにあった。「休刊の辞」は、「わたしたちをとりめぐる歴史的社会的状況の急速な発展」に対応しようとすれば、「民話の

遺産だけ」を追求する姿勢では、「民衆の文化、民族の文化の多様な諸領域へ対する総合的関心」の高まりには対応できないという認識で結ばれている。

休刊時の編集部の心境を、いまでは正確に推し量ることが出来ない。しかし、民話について何か「一つの方向を定めてしまうより前に、むしろ雑多なものをつくることで“民話”ということばのもつイミを一度はバラバラにし、それを組みかえ、巾をひろげ、柔軟なものにしておきたい」という願い（「編集後記」二四号）は、後年の、「売れない」が「面白かった」雑誌という評価（二八）や、「一九五〇年代の「民話の会」のような団体を作りたい」（二九）という言葉を見ると、ある程度肯定的に達成されたといえる。

では最後に、「比喩的」とも称された、雑誌『民話』の「民話」概念について今一度まとめておこう。

第一に、「民話」は「民族」の遺産であるとともに、現代においてつくり出されて行くはなしとして捉えられた。この文脈において民話は、大衆と知識人の垣根を越えて、普遍的に理解されるよう形象化されることが目指された。

第二に、典型化や普遍化という第一の捉え方とは、ある種逆行する形で、個人の民話の探究がなされた。この方向性は、採集する民間説話の範囲を昔話に限定しがちであった戦後の民俗学への批判という側面をもっていたが、同時に、現場で採訪される多様な話の存在意義を保障する側面もあった。

第三に、「現代の民話」という立場が提唱された。これは端的に

言うと、現代社会の矛盾となるようなテーマや、特定の事件を、民話という形に転形して共有しようとするものであった。「現代の民話」は、事件のモデルが誰か分からないように隠されて書かれる一方で、そのモデルの身に起こった社会的抑圧の性質が、読者や観客に共有され、連帯のきっかけになることを目指して書かれた。

第四に、「現代の民話」と関連して「民話のリアリズム」という考え方が提出された。この考え方は、民話を虚構や文芸として検討する文脈において示されたものである。見る主体が対象をどのように見るかではなく、〈主体∥民衆〉にとって、対象がどのように「見える」世界」として立ち現れるかを論じるための概念で、民話の虚構を単なる空想とは異なる次元においてつかもうとした試みであった。「見える」世界のリアリズム」概念については、後年の民話運動において、語りに現れるとつびな「事実」を「あったること」として捕まえようとする立場につながる可能性も考えられる。

以上、「民話」概念について改めて整序してきたが、これらの概念にはそれぞれに限界もある。特に、敗戦直後のマルクス主義歴史学の影響を直接的に受けた第一の視点では、「民族」や「民衆」をやや無批判的に称揚する向きがあったり（三〇）、地方に住む個人の体験を民衆一般のものとして普遍化しようとする志向がみられた（三一）。

いくつかの問題を含み込んで展開した雑誌『民話』の「民話」概念であるが、本論は、民話運動のはじまりである一九五〇年代にお

いて、この「民話」という語が「一種の比喩」表現として機能し、複数の論者による議論を集め展開させる駆動点として働いたことを強調して検討を終えたい。一九五〇年代の運動を参照し、「民話」という語が再び熱く語られるようになる一九七〇年代については、今回の結果をふまえ、次稿の課題とする。

## 注

- (一) 重信幸彦「運動の時代と「聞き書き」という実践——一九五〇年代日本における民話運動とサークル運動」『日本學』第二九集、東國大學校文化學術院日本學研究所、二〇〇九年一月、六九—七〇頁。および小熊英二『民主と愛国 戦後日本のナショナルリズムと公共性』新曜社、二〇〇二年を参照。
- (二) 鳥羽耕史『一九五〇年代——「記録」の時代』河出書房新社、二〇一〇年、一六頁。および「総特集 戦後民衆精神史」『現代思想』二月臨時増刊号』第三五卷第一七号、二〇〇七年一月。成田龍一『近現代日本史と歴史学——書き替えられてきた過去』中央公論新社、二〇一二年、二七五—二七七を参照。
- (三) 新木安利『サークル村の磁場——上野英信・谷川雁・森崎和江』海鳥社、二〇一一年。水溜真由美『「サークル村」と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版、二〇一三年。道場親信『下丸子文化集団とその時代——一九五〇年代サークル文化運動の光世』みすず書房、二〇一六年。宇野田尚哉他編『「サークル」の時代』を讀む——戦後文化運動研究への招待』影書房、二〇一六年など。
- (四) 岩本通弥「生活」から「民俗」へ——日本における民衆運動と民俗学。重信幸彦「運動の時代と「聞き書き」という実践」(いづれも『日本學』第二九集、東國大學校文化學術院日本學研究所、二〇〇九年一月に所収)。花部英雄「童話、昔話、民話研究の足跡」。重信幸彦「話」という言語実践へのまなざし」(いづれも日本口承文芸学会『こえのことの現在——口承文芸の歩みと展望』三弥井書店、二〇一七年に所収)。

- (五) 例えば、重信幸彦は注一、注四の論文で「集団創造」や「聞き書き」の問題を、民話運動と同時代のサークル村の運動が有していたと指摘している。
- (六) ただし近年、野村典彦によって一九二〇年代から一九八〇年代にかけての民話(運動)の素描が試みられている。(野村典彦「大正・昭和初期の「民話」とその思想——水野葉舟や農民文芸運動を視野に」『口承文芸研究』第四三集、二〇二〇年三月。「一九五〇年代の民話から「現代民話考」へ——瀨川拓男と松谷みよ子の「民話」」。『國學院大學栃木短期大学日本文化研究』第五集、二〇二二年一月)。
- (七) 吉沢和夫「民話運動事始——「民話の会」のころ——」『民話の手帖』第一八号冬、一九八三年十二月、一九頁。なお、雑誌『民話』の発刊までの出来事や時系列については、本論を多く参照した。
- (八) 吉沢和夫、前掲論文、三一頁。
- (九) 池田亮「第II部総説 西欧への二つの挑戦——脱植民地化と冷戦の複合作用——」『冷戦史を問いなおす「冷戦」と「非冷戦」の境界』ミネルヴァ書房、二〇一五年、一五六頁。
- (一〇) 民話の会「日本における民話の問題」『文学』第二三卷第六号、一九五五年六月、五七—三頁。
- (一一) 要約文については、注一の重信幸彦「運動の時代と「聞き書き」という実践」の七二頁を参照した。
- (一二) 吉沢和夫、前掲論文、三二頁。
- (一三) 米屋陽一「民話運動の50年「むかしむかしの会」から「日本民話の会」まで」『子どもの文化』第四九卷第七号、二〇一七年八月。重信幸彦「運動の時代と「聞き書き」という実践」『日本學』第二九集、東國大學校文化學術院日本學研究所、二〇〇九年一月。
- (一四) 『民話』の知名度を同時代的に高めた要因には、総合雑誌で活躍していた論客による大衆論の展開(藤田省三「大衆崇拜主義批判の批判」五号、日高六郎「大衆論の周辺」六、七号、谷川雁「観測者と工作者」九号、吉本隆明「海老すきと小魚すき」一二号)や、地方の闘争に取材したルポルタージュ記事、座談会やシンポジウム記事の充実もあるが、本論では割愛し、今後の課題としたい。
- (一五) 未来社は、一九五一年に弘文堂から独立した西谷能雄によって設立された出版社。同社の初めての出版物は、民話運動の発端となった木下順二の『夕鶴』と、『三角帽子』及び、山本安英の『歩いてきた道』の三冊である。未来社の西谷と細川隆司(西谷と同時期に弘文堂を退社)は、一九五一年一

一月二日から一二月一四日にかけて行われた劇団ぶとうの会の地方公演に、この三冊を持って同行しており、同社が民話劇や戦後の民話ブームと根強い関係を有していたことがわかる。なお、同社が一九五七年に刊行を始めた再話的な民話集「日本の民話」は、丸山真男「現代政治の思想と行動」とともに、未来社の経営危機を支えたシリーズで、一九八〇年までに本巻七五冊と別巻四冊を発行している（『ある軌跡——未来社15年の記録』一九六七年三月を参照）。

(二六) この六名は、木下順二が民話劇「わらしべ長者」（初出は『婦人公論』一九五三年二月号）を書いていた頃に、再話の「ことばの問題、文学の問題」を討議するため、木下に集められたメンバーとされる。のちに、岩波少年文庫の編集者であったいぬいとみこも加わり、このとき討議された話は、一九六二年に『わらしべ長者 日本の民話二二選』として同文庫に収められている（吉沢和夫・米屋陽一「吉沢和夫が語る民話の半世紀を振り返る」『聴く・語る・創る』別冊、二〇〇三年一二月、一〇四頁を参照）。

(二七) 小熊英二、前掲書「第八章」を参照。なお付言すると、近年、国民的歴史学運動については高田雅士らによる再検討が積極的に行われており、運動が「終焉」したとされた一九五五年以降の運動の内実や可能性が、主に東京以外の地域での事例によって明らかにされはじめている（『国民的歴史学運動を問うことの可能性』『新しい歴史学のために』第二九三号、二〇一八年一二月。「黨員歴史家の当面の任務」と国民的歴史学運動研究」『歴史評論』第八四七号、二〇二〇年一月など）。

(二八) 木下順二「民話の世界」『民話の発見』大月書店、一九五六年、八五頁。（初出は『東京新聞』一九五五年四月七〜九日）。

(二九) 宮本常一は、木下順二に「優れた民俗学者」として推薦される形で『民話』の編集委員に参加している。一人の人間の生涯に焦点を当てて聞き書きする、宮本の『河内国滝畑左近熊太翁旧事談』（アチックミュージアム、一九三七年）に感銘を受けていた吉沢和夫は、「ああいう聞き書き」をぜひ書いてほしいと宮本に依頼し、「年寄りたち」（のちの『忘れられた日本人』）の連載を開始したとされる（注一六、吉沢和夫「民話の半世紀を振り返る」一九七九頁を参照）。

(三〇) 引用は、木下順二「民話管見」『民話の発見』大月書店、一九五六年、七八〜七九頁。

(二二) 木下順二『木下順二集四』岩波書店、一九八八年、二九七頁。

(二三) 山代巴『民話を生む人びと』径書房、一九九一年、二七頁。（初出は、『民話を生む人々』岩波書店、一九五八年）。

(二四) マクシム・ゴーリキーの戦後民俗学における受容については、加藤秀雄「マクシム・ゴーリキーのフォルクローラ論と日本におけるその受容」（『常民文化』第三五集、二〇一二年三月）に言及があるとともに、運動の当事者である益田勝実も「民話研究の歴史」（『日本の民話』毎日新聞社、一九六〇年）の中でゴーリキーについて言及している。西郷竹彦が、『民話』三号で紹介したロシア関連の書籍は以下の通りである。「ソヴェト教育大学の文学教科書」（書誌不明）、アレクセイ・N・トルストイ編／勝田昌二訳『ロシアの民話』（未来社、一九五三年）、アフナーシェフ編／神西清訳『火の鳥』（岩波少年文庫、一九五二年）、西郷竹彦編『ロシアむかしばなし』全六巻（宝文社、一九五六〜五七年）、西郷竹彦編『中学生・世界民話全集・ロシア編』（宝文館、一九五八年）など。なお、民話運動と西郷竹彦が担っていたロシア文芸論との関係、また、五〇年代の社会主義リアリズムとの距離間については今後の調査課題としたい。

(二五) 小野和子「村ばなしと女の世界」『民話の手帖』第二三二号、一九五八年四月、八四〜八五頁及び、「松谷みよ子『現代の民話』あなたも語り手、わたしも語り手」『現代民話』への道を切り拓く』『現代思想』第四八巻第一号、二〇二〇年八月。

(二六) 注二四を参照。

(二七) この間の会の歩みは、「聴く語る創る 特別号日本民話の会五〇年のあゆみ」第二八号、二〇一九年一月に詳しい。

(二八) 『ある軌跡——未来社15年の記録』未来社、一九六六年、七七頁。

(二九) 注二七、四〇頁の丸山真男の評価。

(三〇) この点に関しては、民族や民衆の遺産としての民話なるものを「肉眼的にとらえうると前提」するのは「錯覚」ではないかといった類いの批判として、谷川雁が指摘している（「観測者と工作者」九号）。

(三一) この点については、森崎和江が宮本常一とのやりとりにおいて、「田舎の非情をついばんで東京博物館におさめ」るやり方として批判している（「東京の人へ」二二号）。

\*引用に際して傍点は省略した。本論を執筆するにあたっては、二〇二〇年二月一日に、大阪市東淀川区の貸し会議室（シルク会議室）で開催された読書会（「雑誌『民話』を読む会」）にて、多くの示唆を頂きました。参加者のみなさまには深く感謝申し上げます。なお、本論はJSPS科研費（特別研究員奨励費、課題番号20J14917）による研究成果の一部である。

## Abstract

### Folk-Tale Movement in 1950s Focusing on the magazine “Minwa”

TAKABATAKE, Saki

**Keywords:** postwar popular culture movements , national historical movement, KINOSHITA Junji, YOSHIZAWA Kazuo, MIYAMOTO Tsuneichi

This paper discusses the Folktale movement (Minwa-Undo) that developed in Japan in the 1950s. This movement is one of the postwar popular culture movements. In recent years, research has been conducted on other popular culture movements of the same period, but the complete picture of the Minwa-Undo has not yet been examined. This paper aims to clarify a part of the Minwa-Undo by analyzing the various concepts of "Minwa" developed in the magazine *Minwa*, which was published between 1958 and 1960.